

生活保護受給は「悪」か

人気お笑い芸人の母親の生活保護受給をめぐる問題を機に不正受給や制度の不公平がテレビや雑誌で報じられています。不正受給への対策を論じることは大切ですが、一部では福祉に頼るのを「恥」と思わないことが「悪」のように言われます。生活支援が必要な人たちはどう受け止めているのでしょうか。

「周囲の目が急に冷たくなった」。2年前から生活保護を受けている東京都内の女性(50)は、お笑い芸人の問題が5月に報じられてからの変化を、そう話す。

都営住宅で中学生の息子と暮らす。8年前に離婚後、会社員として生活を支えていたが、病気で入院して失職。退院後、短期アルバイトでやりくりするうち、再び体調を崩し、働けなくなった。

当初は「生活保護は恥」と思い、受給を考えもしなかったが、食費にも困るようになり申請した。その間、体調はさらに悪化し、今も完治していない。「もっと早く申請しておけば」と悔む。

6月、再就職の企業面接で生活保護受給を明かすと、こわばった表情の担当者に言われた。「あなた自身の問題があったのでは」。思い出すと、今も涙が出そうになる。

大阪府内で中華料理店を切り盛りしてきた女性(75)は、生活保護を申請すべきか迷っている。2年前、夫(78)と約40年続けた店をたたんだ。夫婦とも無年金。「商売が忙しく、年金手続きがよくわからなまま過ぎていた」といい、加入期間が足りなかった。収入は同居する長女(41)のパート代など約11万円。家賃7万円に持病の医療費もあり、蓄えを取り崩してしのぐ。それ以来年々底をつく。

生活保護を受ければ、基準の約21万円から収入の約11万円を差し引いた額が支給され、医療費の自己負担もなくなり、暮らしは楽になる。だが、抵抗感があるという。

夫は「福祉の世話になるのは、昔は恥ずかしいことだった。できるなら考えたくない」。女性も「生活を長く支えられる制度がほかにあればいいのに……」と悩む。

面接の相手「あなたに問題あったのでは」

無年金夫婦「福祉の世話になるなんて…」